

後から振り返ると、誰しも学生時代、会社員時代に、何度か人生の分岐点とも思えることに当たっているようである。また、日本の世界戦略にも、同じような分岐点があるように思う。

学生時代における私の分岐点の一つは大学入試にあった。九州大学受験前、数学の先生のアドバイスは、「九大は勘違いを誘う問題が多い。半分出来れば良い」であった。私は半分で次に進まずチェックしたら、やはり落とし穴にはまっており、結局、残り半分の問題は手つかずとなった。

試験終了後、「今年の数学は易しかった。全部書いた」という声が多く、私は九大不合格を覚悟したが、結果は逆であった。「間違った箇所が分かり心配する者は合格し、正解の箇所を思い安心する者は不合格となる」。これは、何にでも当てはまる真理なのかもしれない。

会社における分岐点は、会社人生の危



分岐点

機を間一髪、運よく乗り切った時のことが忘れられない。日本の10電力会社は、1974年から1980年にかけて3回の大幅な電気料金の値上げを行った。1974年は石油高騰による値上げで九州電力は48・07%アップ、1976年は大幅な物価上昇に対応した値上げで24・84%アップ、1980年は再び石油高騰による大幅値上げで47・80%アップであった。

ただし九州電力は、1980年の値上げの後、2013年の値上げまでの33年間で合計8回の値下げを行い、その結果、2010年には15・2円/kWhと、全国で2番目に安い料金を実現した。

私は、3度の料金値上げにいずれも従事し、国の審査対応のため東京に長期出張した。危機的状況に直面したのは1976年の値上げの時である。値上げ申請直後に、当社役員をはじめ上司が居並ぶ前で、申請資料を国の審査官に説明する

場面がある。

私もその役を担っていたが、膨大な申請資料の中で、1箇所だけ計算誤りを事後発見していた。そして、皮肉にも審査官のチェックがその誤りの箇所に向けてズンズン進み、指摘寸前まで行ったとき、目の前が真っ暗になり、脇の下から汗がどっと出るといのが本当であることを体験した。幸い、指摘は寸前で止まり、私は危機一髪、難を逃れた。不眠不休で人事を尽くした上でのミスに、天は寛大のようである。

ところで、国の浮沈の判断の責任は、誰が取るのだろうか。現在、日本の最も大きな課題は、失われた20年への対応である。2000年と2015年で名目GDPを比較すると、日本は0.9倍と減少。これに対し欧米諸国は1.7倍、中国は9倍、ロシアは5倍、インドは4倍である。

この停滞の原因は、1985年のプラ

貫正義 ● 学校法人福岡大学理事長

ザ合意にあるといわれている。この合意は米国の双子の赤字を救うため円高を容認する合意で、これで当時、240円/米ドルであった円が、2年余りで120円/米ドルとなった。国際競争力を失った日本企業は海外へ流出し、結果として、国内では若者などの相対的貧困化が進み、それが未婚・少子化へつながっていると見方がある。それを裏付けるものとして、日本の対外純資産残高は、2017年末で328兆円と、27年連続で世界最大債権国となっている。

では日本はどう対応すればよいのか。これを考える能力と責任があるのは大学であると私は思う。年々相対的に低下していく日本の国力を、どうやって回復させるか。貿易立国であった日本が、インバウンド、スタートアップなどで立ち直れるのか。大学はその答えを出さなければならぬ。